

中一国語

坊っちゃん 第二回

講師・・羽場雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・坊っちゃん

◆ 基本情報

・ 著者：なつめそうせき夏目漱石
(1867
〜
1916)

東京大学英文学科卒業後、教師を経て
イギリスに留学。

「わがはい吾輩は猫ねこである」

「こころこころ」などで有名。



・ 時代：明治時代

1906年（明治39年）に
「ホトトギス」という雑誌で発表。

◆ 登場人物

- ・ へ 俺おれ（坊ぼっちゃん） 〓 主人公。親譲ゆずりの無鉄砲てっぽう。
- ・ へ 兄 〓 主人公と仲が悪く、よくけんかをしていた。

・ 父

・ 母

- ・ へ 清きよ 〓 主人公の家の奉公人ほうこうにん。主人公を大変かわいがった。

※奉公人Ⅱ他人の家に雇やとわれて、家事や家業に従事する者。召使めしい。

◆ 場面

- ・ 第一場面：子供時代の無鉄砲な「俺」の悪行。
- ・ 第二場面：母が死んでからの「俺」と父、兄と、清の関係。

- ・ 第三場面：「俺」と清の関係。

- ・ 第四場面：父の死によって家を売る。一家離散りさん。

- ・ 第五場面：兄に金をもらい、物理学校で学ぶ。

- ・ 第六場面：遠い四国の中学への赴任ふが決まり、清と別れる。



小説読解をするときは

- ・登場人物を把握はあくしよう。
- ・それぞれの人物の「性格」と「心情（気持ち）」を読み取ろう。

※ちなみに心情は、ほぼ必ず変化する。

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

父が亡くなり、屋敷や家財道具を売り払い、一家は離散することとなった。兄はある会社の九州の支店へ赴任し、「俺」は物理学校へ入学した。清は奉公する家が無くなってしまったので、しかたなく清の甥のお屋敷へ奉公に出て、甥の家に住んでいる。

次の場面は、物理学校を卒業した「俺」に起こった出来事である。

卒業してから八日めに校長が呼びにきたから、何か用だろうと思って、出かけていったら、四国辺のある中学校で数学の教師が要る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。俺は三年間学問はしたが、実をいうと、教師になる気も田舎へ行く考えも何もなかった。もっとも教師以外に何をしようというあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようと思席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲がたたつたのである。

①引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して、小言はただの一度も聞いたことがない。けんかもせずに済んだ。俺の生涯のうちでは、比較的のんきな時節であった。しかしこうなると、この四畳半も引き払わなければならぬ。生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一緒に鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると、海浜で針の先ほど小さく見える。どうせろくな所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるかわからん。わからんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも、少々めんどうくさい。

(中略)

いよいよ約束が決まって、もうたつという三日前

に清を訪ねたら、北向きの三畳に、風邪をひいて寝ていた。俺の来たのを見て起き直るが早いか、坊っちゃんいつうちをおもちなさいますときいた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いてくると思っっている。そんなに偉い人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよばかげている。俺は単簡に当分うちはもたない。田舎へ行くんだと言ったら、^②非常に失望した様子で、ごま塩の*びんの乱れをしきりになでた。あまり気の毒だから、「行くことは行くが、じき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る。」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから、「何か土産に買ってきてやろう、何が欲しい。」ときいてみたら、「最後のささあめが食べたい。」と言った。最後のささあめなんて聞いたこともない。だいいち方角が違う。「俺の行く田舎には、ささあめはなさそうだ。」と言って聞かしたら、「そんなら、どっちの見当です。」ときき返した。「西の方だよ。」と言うと、「箱根の先ですか、手前ですか。」と問う。ずいぶんもてあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買って来た歯みがきとようじと手拭いを、ズックのかばんに入れてくれた。そんな物はいらなと言っても、なかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだ俺の顔をじっと見て、「もうお別れになるかもしれません。ずいぶんごきげんよう。」と、小さな声で言った。目に涙がいつぱいたまっている。俺は泣かなかった。しかし、もう少しで泣くところであった。汽車がよつぽど動きだしてから、もうだいたいじょうぶだろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだか大変小さく見えた。

(夏目漱石「坊っちゃん」)

*蟄居：家の中に引きこもっていること。

*びん：こめかみの左右の生えざわから耳の上あたりまでの髪。

【第一問】

傍線部①「引き受けた」とありますが、なぜ「俺」は四国の中学校への赴任を引き受けたのか。適切なものを選びなさい。

ア、昔から教師になるのが夢だったから。

イ、教師になったら清を喜ばせることができると思ったから。

ウ、自立して、父や兄を見返したいと思ったから。

エ、特に考えもなく、やりたいこともなかった。なので後先考えず返事をしたから。

エ

Ⅱ へ 無鉄砲 へ な気質は、

大人になっても変わっていない

【第二問】

傍線部②「非常に失望した様子」とあります。清がそのような様子になったのはなぜですか。文章中の言葉を使って、清が失望した直接の理由も明示して三十字以上五十字以内で書きなさい。

「俺」(坊っちゃん)が当分うちをもたず、田舎へ行くことを聞き、坊ちゃんのもとへ奉公に行けないことを知ったから。

〔解説〕

「俺をもつて、将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた」には、清のへ 将来、坊っちゃんにお仕えしたい(坊っちゃんのもとで奉公したい)というく 気持ちが表れている。

【第三問】

「清」の人物像として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、主人思いの昔かたぎで、情に厚い人物である。

イ、楽観的で、決して落ち込むことのない人物である。

ウ、思慮深く、人に対する思いやりを常に忘れない柔らかな人物である。

エ、芯が強く冷静で、何事にも動じない人物である。

ア

【第四問】

「俺」が出立の日に、「もう清の支えはないのだと実感して、心細い気持ちになった」と、「そして、「清が年老いていると感じた」と」を、端的たんに表している人物描写びょうしゃの部分で抜き出さない。句読点も一字と数えます。

なんだか大変小さく見えた。